
家庭教師ヒットマンREBORN

純白の用心棒来る！！！！

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN 純白の用心棒来る!!!

【Nコード】

N2608Y

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

氷湊吹雪ひみなみふぶきは、死に方があまりにもしょぼかったので神によりりボーンの世界に転生した。刀語の完成形変体刀を使いLet's start 原作ブレイク!

転生作品2作目です。ただ、作者は相変わらず文才がないので温かい目でお読みください。

プロローグ

生前、俺はピンチをチャンスに変える男だった。

たとえば、明日試験の日に限って早く寝てしまい勉強が不十分の時は、必ず台風が来て延期に。

たとえば、財布の中身が、悲しいことになっている時、たまたま買った宝くじで当選した。

たとえば、死んだのに、神の手違いで転生させられると言うことに。

そう、今俺は死に、神とご対面だ。

「つで、神様は俺を転生させてくれるんだな。」

「もちろん。でも勘違いするのではないぞ。お主が死んだのはわしの手違いではなく、わしの行為じゃ。」

「は？」

「お主は、自分がピンチの時に必ずチャンスが来ると思っているが違いのじゃ。試験当日、確かに台風が来て延期になるが、その日に限ってお主の好きなコミックの発売日だったじゃろ？」

「確かに。」

「お主がたまたま買った宝くじが当選したとき、もらった1万円

を溝に落としたじゃろ?」

「確かに。」

「じゃから、お主はピンチをチャンスに変え、そのチャンスをピンチに変えるのじゃ。」

「ってことは、俺はこのチャンスをピンチに変えるのか?」

「安心せい。さつきわしがお主が死んだのはわしの行為ツと言ったじゃろ。もちろん、ピンチに変えるかチャンスを掴むかは、お主しだいじゃ。」

「え、やっぱ俺ピンチになるのか?」

「この、二つの箱の中にそれぞれ転生後のプランが入っておる。さあ、どちらか選ぶがよい!」

「えーと中身は?」

「片方は、お主の好きな家庭教師ヒットマンREBORNの世界に転生じゃ。もちろん特典付で。そして、もう片方は、お主の好きな刀語の世界に転生じゃ。こちらは、最終回の尾張幕府八代目将軍、家鳴匡綱になるんじゃ。もちろん、特典など付いておらんぞ。」

「前者は、俺にとっては最高だが、後者は『ちえりお!!!』って言われてただ暗殺されるだけじゃん。」

「だから、お主の最後の運試しじゃ。」

「わかった。俺が選択するのは左の箱だ。」

「左の箱の中身は

リボーンの世界に転生じゃ。」

「よっしゃーーーー！！！！」

「なら、何がほしい？三つまでなら聞き入れるが。」

「なら、まず刀語の完成形変体刀十二本と真庭忍術（拳法も含む）とそれぞれの所有者の技を使えるようにしてほしい。」

「虚刀流はいいのか？」

「あれは、チート気味だからいい。あと、七実の見稽古もいらん。」

物語を楽しみたいからね。」

「あと二つは？」

「オリジナルの完成形変体刀がほしい。あと、そーだな転生後考えてもいいのか？」

「もちろんOKじゃ。」

「なら、保留で。」

「そろそろ時間じゃ。」

「では、神様、第二の人生楽しませてもらいます。あと最後に俺の持っている炎の属性と現世での死に方を教えてくれ。」

「目の付け所がいいのー。わしがお主を選んだのは現世の時から、大空と吹雪の炎を持っていたからじゃ。向こうの世界にはお主の他にも転生者がおるからのー。」

「え？つていう事は敵か？」

「なんとも言えんところじゃ。お主自ら見てみるがよい。」

「つで、俺の死に方は？」

「聞かないほうがよいぞ。」

「いいから教える！ー！」

「お主の死に方は、道端の空き缶に躓き、打ち所が悪かったらしく死んじまったようじゃ。」

「俺ってそんな死に方をしたのか。」

「そんなに落ち込むでない。そんなしよぼい死に方をしたからこそわしがお主に目を付けたんじゃ。」

「……」

「どうしたのじゃ？　ってもう行ってしまったか。」

目が覚めると俺は、イタリアにいた。

プロローグ（後書き）

誤字脱字等ございましたら教えてください。

登場人物と刀の紹介

ひみなとふぶき
氷湊吹雪

性別 男

年齢 ツナたちと同じ

容姿 美形 髪は白い

炎の属性 大空
吹雪

性格 基本優しく親しみやすい
怒ると怖い
仲間思い

特技 剣術
武術
忍術

所持品 完成形変体刀（今のところ12本） 刀の説明はWikipediaを参考。属性は、オリジナル。

ゼットウ・カンナ
絶刀「鉋」

「頑丈さ」に主眼が置かれている。切刃造の直刀。刀身は五尺ほど。鐔や鞘がなく、綾杉肌に二筋桶が彫られている。決して折れず曲がらない。斬るよりも突く方に向いている。

属性は、「雷」

ザントウ・ナマクラ
斬刀「鈍」

「切れ味」に主眼が置かれている。柄や鍔、鞘が真っ黒な刀。あらゆる物を抵抗なく一刀両断できる。刀身によって物質の分子結合を破壊しているため、このおかげで「なんでも斬れる」という特性を発揮している。

属性は、「雨」

セントウ・ツルギ
千刀「？」

「多さ」に主眼が置かれている。千本で一本と言われている、千本の刀すべてが材質、重量、切れ味とも同じに作られている点を除けば、完成形変体刀で唯一、普通の刀。刃渡り二尺四寸、三ツ棟、刃文は小乱の鑄造。

属性は、「嵐」

ハクトウ・ハリ
薄刀「針」

「薄さ」と「軽さ」に主眼が置かれているが、劇中では「脆弱さ」がその特徴とされる事もある。向こう側が透けて見え、刀身自体も目をこらさないと見えないほどに薄く、それ故に美しい。十二本の中で最も扱いにくく、壊れやすいとされており、剣筋をずらさずに完全な軌跡を描いて斬りつけなければ攻撃すら出来ない。また、当たったときに相手が身体の筋をずらしても壊れてしまうため、使い手にはこれを壊さず扱う高い技術が求められる。双刀「鎚」の対とされている。

属性は、「雲」

ソクトウ・ヨロイ
賊刀「鎧」

「防御力」に主眼が置かれている。見た目は七尺ほどの西洋甲冑。部品の継ぎ目が刃になっており、日本刀を鍛えるように作られた鎧とも言われた。受けた衝撃を外に逃がす機能を持っており、装

甲を透過して内部に損傷を与える鎧通しのような技も防ぐことができる。また、一度身につけると内部からしか開けられないため、強引に脱がせることも不可能。その機能から圧倒的な防御性能を持つ。属性は、「雨」

ソウトウ・カナツチ
双刀「鎚」

「重さ」に主眼が置かれている。刃渡り二尺三寸ほど、鞘も鏝も刃文もなく、上下の区別もあいまいな石刀。そのためにどちらでもない自在という意味で「双」の字が当てられている。軽く投げて重力に任せただけで、硬い地面にめり込むほど重い。薄刀「針」の対とされている。

属性は、「雷」

アクトウ・ビタ
悪刀「鏢」

「活性力」に主眼が置かれている。変体刀十二本の中で最も凶悪な一振りとされる。忍者の道具である苦無の形をしており、常に雷を帯び、電極のように身体に差し込むことによって、所有者の疲弊も死も許さず人体を無理矢理に生かし続ける凶悪な刀。

属性は、「晴」

ビトウ・カンザシ
微刀「釵」

「人間らしさ」に主眼が置かれている。日和号と言う名の人形。原動力は日光。「微刀」は「美刀」とかけている。

属性は、「晴」

オウトウ・ノコギリ
王刀「鋸」

「毒気のなさ」に主眼が置かれている。柄を入れても三尺にも満たない木刀。毒気の無さを超えて所有者の毒気を抜く作用にまで達しており、心を正して精神的王道を歩ませる。よく手入れされており、古い時代を感じながらもつい今さっき作られたような真新しい

さも感じさせる、矛盾した印象がある。毒刀「鍍」の対とされている。

属性は、「霧」

セイトウ・ハカリ
誠刀「銓」

「誠実さ」に主眼が置かれている。刃なき刀であり刀の柄と鍔だけしかない。秤は天秤を意味し、己自身を測る刀。相手を斬る刀ではなく、自分を切る刀、自分を試す刀。自分を知る刀であり、無刀とも表現された。

属性は、「霧」

ドクトウ・メツキ
毒刀「鍍」

「毒気の強さ」に主眼が置かれている。禍々しい色の鞘に収められた、大きく反った鍔のない黒刀。王刀「鋸」の対とされている。持つと人を斬りたくなるという変体刀の「刀の毒」が、もともと深く刻み込まれている。

属性は、「嵐」

エントウ・ジユウ
炎刀「銃」

「連射性と速射性と精密性」に主眼が置かれている。回転式連発拳銃と自動式連発拳銃からなる一対の「刀」。連射性と速射性に加え高い命中精度を持っている。遠距離から攻撃が可能なため半端な間合いは意味をなさない。

属性は、「大空」

登場人物と刀の紹介（後書き）

完成形変体刀の属性は、オリジナルなので意見等あったらよろしくお願いします。

また、吹雪の守護者の使命のアイディアも募集しています。

HELLO VARIIAの皆さん（前書き）

？ユツキーは魔王様？さん、感想ありがとうございます。

吹雪の守護者の使命、完成形変体刀のアイデアまだまだ募集中です。

HELLO VARIIAの皆さん

目が覚めると俺は、イタリアにいた。

「これがリボーンの世界かー。」

俺は、生前一樣イタリア語は勉強した。だから分かる。ここがイタリアで、目の前の建物がVARIIAのアジトであることが。

「えーと、神様からもらった手紙には

『向こうの世界に着いたら目の前にVARIIAのアジトが見えるじやろ。VARIIAに入るかはお主しだいじやが家は用意しておらんからな。つまり……じゃ。まーがんばって。』

あいつ、神じゃなくて紙だな。次会ったら殺そつか。ってか、仕方ない。逝くか。」

今、VARIIAのアジトの前にいる。紙の施しで、ここに逝くしかない。

「ノックしてもしーし。すみません。」

「……………」

誰もいない。今は皆留守か。出直そうと思ったが光る何かを発見した。

「なるほど、いるなら出て来てくださいよ。」

「ししし、ばれたか。」

登場、自称^{ベル}王子!!!

「自称じゃねーし。だって俺王子だもん。」

「はいはい、白馬の王子様。ところで、XANXUSいる?」

「ボスはいるが何の用?」

「いやーVARIIAに入りたくてさー。」

「お前が日本からスカウトされてるやつか。」

「(紙のおかげか。いや、こづいつときは神か。(そつだが。」

「ししし、なら付いて来い。」

「ここがボスの部屋。んじゃ、入るぜ。」

ギイ

「ボス、連れてきたぜ」

さすがXANXUS。顔、怖い。

「お前が、氷湊吹雪か。」

「住む家がなくて、ここに来ました。吹雪とでも読んでください。

「フツ、ぶわぁ　　はっはっ！！面白え！！ベル、カス鮫を呼べ

！！」

「わかった。すぐに連れてくる。」

ベルはすぐに出ていった。つまり二人っきり。

「……………」(吹雪)

「……………」(XANXUS)

「……………」(吹雪)

「……………」(XANXUS)

話す内容がない。ものすごく息苦しいんですけど。

「うゝおゝいゝ！！何か用か、ボス。」

バリン、！！

ドカツ！！

説明しよう

バリンは、ボスがグラスを投げて割れた音。

ドカツは、俺が近くにあった本を投げて当たった音。

「「「るせえ。」」

「ボスと吹雪、息びったりじゃん。」

「で、何のようだあ？」

「「「るせえ。」」

「「「またもびったり。」」

「「「こんなやり取りが30分も続き、」

「「「で、何のようだ。」」

「「「吹雪の力が見たい。吹雪と殺り合え。」」

「「「あゝどづいことだあ。」」

「「「「るせえ。」」

「どっぴいっことだ？」

「こいつが、日本から来た奴だ。つべこべ言わず殺れ。」

「分かった。まず外に出る。試合は対一のどちらかが戦闘不能か降参するまでだあ。」

「「「るせえ」」

外には、XANXUSやベル、マーモンもいた。

「俺が勝つたら出直せ。負けたら、お前にはしばらく監視がつくが幹部入りだあ。」

審判役が俺とスクアーロを交互に見て、声を上げた。

「それでは始めてください。」

「その前に、1から12まで好きな数字を言って下さい。」

「はあ？」

「とつとつと言え、カスアーロ。」

「もちろん、1だあ。」

「決定。お前は、絶刀ゼットウ・カンナ「鉦」で殺るか。」

HELLO VARIIAの皆さん(後書き)

俺VSスクアード（前書き）

吹雪の守護者の使命、完成形変体刀のアイデアまだまだ募集中です。

俺VSスクアーロ

「決定。お前は、絶刀ゼットウ・カンナ「鉋」で殺るか。」

「絶刀「鉋」？何だあ、お前剣士かあ？」

「まー、剣士であり、忍者だ。」

「忍者？」

「日本の暗殺専門部隊だ。」

「お前みたいなガキが暗殺だあ？」

「ガキだからと言っても手加減は禁物だからな。忍者は、卑怯が売りだから何するか分からないぜ。」

「では、改めてSスヘルヒ・スクアーロVS氷湊吹雪・・・勝負開始！！」

「とばすぜえ！！」

開始と同時にスクアーロが前に出た。

ビュッ！！

オレはスクアーロの剣をかわす・・・が

ドシュッ！！

スクアーロは例の刀からの火薬を繰りだした。

「仕込み火薬ねー。こっちも剣じゃないじゃん。」

ドゴッ！！

「ほう・・・よけたか。」

「（ニヤッ）」

「ところで、お前の剣はどうしたあ？」

「さあね。」

「チッ！！」

また前に出るスクアーロ。だが・・・さっきとは動きが違う。

ピシヤ・・・

「！！」

スクアーロが目の前から消えた。

バツ！！

後ろからか？

ガッ！！

「うゝおいつ！！あれがオレの力だと思ったら大間違いだあ！！死ねえ！！！」

「また、仕込み火薬か。無駄なのに。」

そう、俺には、アレがある。

「今度は、俺からいくぜ。」

俺は、地面を真庭拳法を使い殴る。

「ちい、目晦ましかあ？……！！？」

「手裏剣砲！！！」

「うゝおいつ！！何だ、この攻撃？」

この技には、さすがのXANXUSも驚いている。

「かわしたか、さすがVARIATてとこだな。なら、もうちょい本気になるぜ。」

「うゝおゝおい！！！図に乗るなあ！！ガキがあ！！！」

「さつきからガキ、ガキうつせーよ。相生拳法『背弄拳』！！！」

「！？」

「XANXUSもさつき驚いてたがこれはまだ序の口だぜ。」

と言っても、背弄拳は相手の後ろを取る拳法なのでスクアーロには姿は見えない。

「どこにいる？」

「お前の後ろ。」

「凶に乗るなよガキ！！オレの剣の真の力を思い知れ！！」

ズアッ！！

「スクウトロ・ディ・スクアーロ
鯨特攻！！！！」

「刀剣砲！！！！」

さすがに、威力では負けるか！。でも

「何？俺の剣が？」

スクアーロの刀が刃こぼれし驚いてるな。

「さつき言ってた絶刀「鉦」がこれだ。この刀は、直刀にも関わらず、決して折れない、曲がらない刀だ。」

「まだだあ。スクウトロ・ディ・スクアーロ
鯨特攻！！！！」

「二度同じ手は通用しないことくらい、お前が一番分かってるだろ。これで終わりだ。限定奥義、報復絶刀！！！！」

鯨特攻をかわし、報復絶刀を放つ。

「止め!!!」

俺は、報復絶刀をスクアーロののど寸前でとめたから生きている。

「俺の勝ちだ。」

「ふん。カス鯨の負けか。」

こうして、俺はVARIIA幹部になった。って、昇格早っ!!!

俺VSスクアーロ（後書き）

戦闘場面下手ですなー。次回こそは、って次回は戦闘場面ありませ
ん。

V A R I A L I F E V e r ・ ベ ル (前書き)

試験が昨日あったため、日が空きました。試験の結果は・・・。
試験ってなくなればいいのに。

V A R I A L I F E V e r . ペル

今日で入隊&幹部二日目だが、さすがV A R I A ってとこだ。なんせ、朝食にしる死闘と化している。っと言ってももう慣れたが。そして、俺は今、自称王子ことベルフェゴールと殺^やり合っている。なぜなら、

〜朝食後〜

「ししし、お前スクアーロに勝ったんだって？」

「ああ、っで何のようだ？まー、おおよその検討が付いているがな。」

「ししし。もちろん殺し合いだよ。お前と一緒に殺^やり合ってみたかったんだよ。」

「なるほど、面白そうじゃん。いつからスタートだ？」

「もちろん、今からさ。」

〜回想終了〜

という流れで、俺は王子様からナイフを投げられている。

「最初の攻撃をかわしたのもまぐれじゃなさそうじゃん。」

「まぐれとか言う以前にナイフを投げる王子ってどんな暴君だよ。」

「だって俺、王子だもん。」

「知らんがな!!」

「そろそろ、お前も武器かなんか出しなよ。」

「なら、千刀セントウ・ツルギ「？」と、極刀キョクトウ・ツル「鉉」でも使うか。」

「刀？でもスクアーロの時使っていた刀とはまた違うじゃん。」

「今回は、これでやってみたいんだ。」

「ししし。やるじゃなくて殺やるでしょ？」

「いや、やるでいい。お前を殺す気はないからな。」

「なに。余裕じゃん。でも、スクアーロと一緒にすんなよ。だって俺、王子だもん。」

「そろそろ、行くぜ。」

そう言って、俺は千刀「？」を千本、あたり一面に投げつける。ちなみに、神の計らいかどうかは知らないが嵐のリング（剣の形をしている。）から、千刀？を取り出せる。もちろん他のも同じだ。

「ししし、お前も投げつけんじゃん。しかもトリック一緒にしたいだし。」

「よく、気付いたな。」

「だって俺、王子だもん。」

「関係ないだろ。」

「ししし、血だよ、血。俺の手が切れたってことはあの刀一本一本にワイヤーが付いてるだろ。」

「先手必勝ってやつだよ。やったもん勝ち。でも、ワイヤーは違
うぜ。あの刀、一本一本に刀かたなが付いているぜ。」

「刀？」

「そう、刀。千刀「？」は数の多さを重視した刀だ。そして、極
刀「鉉」は細さを重視した刀だ。つまり、今王子様は大量の刀に囲
まれた状況だ。」

「さすがに降参だ。ってそんなわけないじゃん。針千本のサボテ
ンにしてやるよ。」

ピッ！！

「バイバイ。」

「お前がな。」

ベルのナイフは、極刀「鉉」によって切られていた。

「????」

「極刀「鉉」は、細いが切れ味は抜群だからな。」

「ししし、今度は本当に降参。つえー、お前。」

「俺のことは、吹雪でいい。」

「じゃあ、俺はベルって呼んでくれ。」

「おう、ベルが友達第一号だ。」

「ししし、吹雪って孤独だね。」

「余計なお世話だ。」

そう言って俺らは笑った。

V A R I A L I F E V e r ・ b e l (後書き)

今回、駄目文。

オリジナル変体刀

極刀「鉉」

細さに重点を置いた刀。他の刀と組み合わせ可能。一見ワイヤー
のようだが、切れ味は桁違い。

属性 嵐

V A R I A L I F E V e r ・ ル ッ ス (前書き)

また投稿が遅れました。最近なかなか忙しくて……次回からはもう少し早められれば、と思います。

吹雪の守護者の使命、完成形変体刀のアイディアまだまだ募集中です!!!

V A R I A L I F E V e r ・ ル ッ ス

ここで、一つ皆に聞きたいことがある。

甘いものは好きか？

俺は、好きである。つとつより筋金入りの甘党だ。たとえば、

コーヒー一杯には、砂糖10本。(1本3g)

角砂糖は、立派なお菓子。

カレーは甘口で、蜂蜜たっぷり。

果汁100%オレンジジュースにガムシロ追加。

などなど、とにかく甘い物好きだ。正直、俺の座右の銘は「糖分」
でもいいと思っている。そんなわけで、今日はルッスーリアと戦闘
中だ。

「なんで、砂糖を追加するだけで怒るんだよ！」

「うるさいわねー。あなたが来てからここが蟻の天国と化したのよ……」

「いいじゃん。蟻もよかつたなー。」

「いいわけないじゃない。蟻なんて気持ち悪い。おかげでボスの機嫌も最悪よ。」

「ドンマイ、ドンマイ。俺はなー体内の80%は糖分で出来ていると言ってもいいほどの甘党だ。」

「そんなんだから、虫歯も増えるし糖尿病になるのよ。」

「わかってねーな。俺は、食後一時間の歯磨きと一日10時間の筋トレをやってたんだよ。しかも、ブドウ糖は脳の栄養分となる。どつかのいかれたオカマとは、格も質も存在価値も違うんだよ。」

「何よ、生意気な坊やね。ちょっと体罰が必要かしら。」

「仕方ない。少々手荒だが甘党代表として、お前を調教してやるよ。」

つという流れで、戦闘が始まったのだ。俺は入隊一週間目にして2度目の死闘を繰り広げている。しかも、俺はこっちの世界では6歳と体力の違いも大きい。

「あなたは、珍しい剣を使いスクアーロやベルに勝ったそうだけど私には無駄よ。あなたみたいなお子と違って、私は体格も体力も実戦経験も違うんですもの！！っとは言ってもあなたもいい体してるわよ。」

「まずい、吐き気がしてきた。それに微熱もあるし、何より気持ち悪いオカマの亡霊が見える。」

「何よその言い方。いいわ。負けたら私の玩具になりなさい。」

「お前が負けたら　　な。」

「な、絶対に負けられないじゃない！！仕方ないわ、手加減なしでいくわよ。」

「来いよ、味覚症状がお持ちのオカマさんよー。」

「あなたにだけは言われたくないわよ！！！！さあ、始めるわよ。」

カッ！！

「早いな。でも、」

バシッ！！

「当たったか。いや当たりにいったか。」

俺の拳は、真っ赤な血で染まっていた。

「そうよ。あなたは私の膝を殴ったわ。私の左足の膝には鋼鉄が埋めこまれたメタル・ニーなのよ。もうあなたの拳は使いものにならないわ。」

「それで、俺の真庭拳法が効かないってわけか。」

「真庭拳法？なんだか分からない戦闘スタイルだけど私のムエタイにはかなわないわ。おとなく私の玩具になりなさい！！」

「そうはいかないぜ。俺の刀がな。」

「な、何よ、あれ??？」

「いけ、ビトウ・カンザシ微刀「釵」、キトウ・ブリキ微刀「鉞」。ヒラウトウラウ微風刀風！！イッキトウセン一微刀殲！！」

微刀「釵」は4本ずつある手足を使い空中から攻撃をし、微刀「鉞」は、6本ある太い腕を使い正面から攻撃をする。

「これらは、人形だが立派な刀だぜ。」

「そんなのずるいわ。」

「お前だつて、足にメタル・ニーを仕込んであったのにそれでもずるいか？」

「やっぱり生意気な坊やね。私の負けよ。」

「なら、罰ゲームを受けてもらうか（笑）」

その日の夕食

「うお、おい、あめえーぞ、この飯……！」

「ししし、確かに甘いし。」

「ボクもそう思うね。」

「だって、吹雪が。」

「ルッスとカスアーロ、うるさい（棒読み）。」

「なによ、それ。」

「……くだらねえ。」

「……………」

XANXUSの殺気、まずいでしょ。皆、もう固まってるし。

「カッ消す!!!!」

その日、いつもよりも過激な運動会が行われた。

V A R I A L I F E

V e r ・ ルツス（後書き）

ちなみに作者も甘党です。甘いものっていいですよね。

オリジナル完成形変体刀

徽刀「鉞」

微刀「釵」に非常によく似ているが、男の人形。太陽光で動く。足は2本だが刀が内蔵されている。また、腕は通常は6本であり、それぞれ刀を持っている。

限定奥義は一徽刀殲。

上半身を回転させながら6本の腕を使い、相手を切り刻む。

属性は、「晴」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2608y/>

家庭教師ヒットマンREBORN 純白の用心棒来る!!!

2011年11月27日01時49分発行